アルタン・カーンと板升

萩原淳平

まえがき
一、板升の成立と發展
イ、板升の語義
ロ、板升の創設
ハ、板升の發展
ニ、板升とアルタンとの關係
二、板升支配の變容——歸化城＝板升説——
むすび

まえがき

明代において北方の蒙古族は、はじめ太祖太宗の遠征を受けて振わなかったが、その後は總じて優勢でたえず明朝を壓迫している。すなわち中期におけるエセンを中心とするオイラート勢力は、土木の變[1]にみるように英宗を捕虜にするようなことまで起した。また末期の嘉靖・萬曆時代に入っては、アルタン・カーンを中心とするタタール部の勢力が隆盛をきわめた。

いま、この末期における中國と蒙古との交渉をみると、嘉靖年間にあっては、アルタン側のしばしばの積極的な馬市開設の申し出があったにもかかわらず、明側がこれに應じないため、タタール部の度重なる中國への掠奪侵入が行われた。しかし隆慶・萬曆に入ると、遂に馬市が開設され、兩者の間は一應安定を保つようになった。そしてこのころ長城地帶には、いたるところ蒙古族と漢人との混住地帶が生れ、城堡や都邑すらも設けられるようになった。ここにとりあげようとする板升は、そのような城堡ないし都邑の一種である。

一、板升の成立と發展

イ、板升の語義

まず板升[2]について一應定義づけてみよう。史料を通じてみると、少くとも板升とよばれるものには三つの屬性があるように思われる。すなわち中國で

(一) 屋といわれているもの。(明史韃靼傳)

(二) 堡子といわれているもの。(大陰樓集)

(三) 城といわれているもの。(明實錄、三雲籌俎考、全邊略記)

以上の三種は、建築上の構造から見れば第一は家屋のみをさし、第二は土壘とか城壁のみをさすが、第三は城壁及び城壁内の家屋等をも含めた城をさすものである。したがってこれは、いわば第一と第二とを併せ總稱したものともいえるであらう。しかしこれについては、語義ばかりでなくてその内容をも分析する必要があるため、板升の成立の由來と、その發展過程をしらべて見ることからはじめてみよう。

大隱樓集の轅門記談(四)に、板升に關する問答が出ている。その中で「板升とは何であるか。」という問に對して、「板升は中國で堡子といわれるものであるが、皆雲晉地方(山西の北部)の叛逆者達が築いて自らまもったもので、蒙古人達が據った所のものではない。」と答えているように、板升の起源はすくなくともいわゆる純粹遊牧的なものではなくて、定着農耕民である中國人の創作によるものである。ここで板升を築いた中國の叛逆者と記されてあるのは、具體的には白蓮教徒を中心とする丘富・趙全・李自馨らをさすのであらう。かれらに關する記錄の早いものは、嘉靖三十年六月に出て來る。

嘉靖三十年といえば、タタールのアルタンにとって記念すべき年であった。この年の三月に至って、アルタン等の數年來の希望であった馬市の開設が明側によって許可され、四月にはその第一回の馬市が行われる事になった。アルタンの喜びはこの上なく、自ら大同に出向いて謝恩表を奉呈し、馬九匹その他をお禮に献上した。そして歸營の途中で前述の蕭芹・丘富・呂明鎭・閻倉らに會ったのである。かれらは、當時中國内では志を達することが出來なくて、百人餘りで一團をなし、長城以北の地に逃れて來たのである。

アルタンに遭遇するとまず蕭芹がアルタンに取り入るため、言葉巧みに話しかけ、雲中に關する戰畧を述べた後で、「その上に私には神術があります。人をのろえば人は死に、城に大聲をあびせば城は崩れる……」と。これに對してアルタンは好奇的な興味をそそられたようである。[3] しかしアルタンは、明朝からの引渡し要求を納れて、やがて蕭芹はじめかれらの徒黨數十人を明側に渡すことになった。たたそのうち喬源・丘富・劉景陽らは遂にタタール人の中にかくれて明側の追求をまぬがれることが出來たが、板升はけっきょくかれらによって築きあげられたのである。

ロ、板升の創設

ここでわれわれは、板升について具體的に語る前に、一應かれらの出身地なり素性なりを述べておこう。まず第一に問題を起した蕭芹は大同左衛の人、丘富も衛の舍人である。周原は黃岡の人で、罰せられて大同で兵役に服していたのが逃亡した者、また劉四は老營堡の戍卒であったが、その徒と共に指揮官を殺して逃亡して來た。張彥文は大同衛の百戶であった。

その外趙全・趙龍は陽和の人、李自馨は山陰の人、王廷輔は渾源の人、呂西川は靜樂の人、このように、いずれも長城附近にいた罪人や叛逆者達で、いわば野心をもちながら中國で望を達しえない不滿の輩であった。しかもかれらを團結させて、北方へ逃れる氣運を作ったのは、山西大同附近にいた白蓮教の呂老祖という者である。かれは白蓮教を廣める事を務としていたが、かれのもとに集まった者は多く叛逆者あるいは罪人であった。しかしかれらは、いずれも大なり小なり讖緯の學を識り、神靈の術を心得ていた。蕭芹は失敗したが、北方に殘った丘富らは、この方面からアルタンの寵を得ることに成功した。その上それぞれ特技をもっていた。たとえば、趙全は魁梧雄健で、謀畧の才があり計畫に長じ、李自馨は文字に通じ、劉四は驍勇敢鬪の性格を有した。特に丘富の弟は大工の心得があり、アルタンの爲に立派な樓房三區を作り、又舟を造ったり農器具を作ってアルタンを大いに喜ばした。この後丘富も弟によって室屋三區を作ったといわれる。「板升とは屋なり」という定義はこれらの家屋をさしていわれたものであらうか。

またあるとき、アルタンが兩腿を患って苦しんだ事があったが、趙全はこの機會を利用し、自分の特技を生かして

アルタンの寵を得ようとして、丘富らとはかって、藥を手に入れ治療して喜ばれたこともあった。これらの特技は、多くの場合かれらの立場を有利に導いた。こうして丘富らはアルタン一族に巧みに信用を得て、地盤を着々かためる一方、タタールと中國との離間策をはかった。馬市が成立した當初には、明朝とアルタン一族とは、比較的順調な關係をつづけるかのようであったが、丘富らの叛逆者をかばうことによって、馬市は間もなく中絶狀態になった。しかし丘富らとしては、それだけではまだ滿足せず、タタールをして明朝と相反目するように仕向けなければならなかった。そこで丘富らは、アルタンに信用されればされるほど、これに比例して離間策を積極化し、機會あるごとに事をかまえては中國侵入を誘導するに努めた。例えば三十三年八月の頃には、あらかじめ朔州塞と內應して三千餘騎と共に進攻した。これは結果において失敗に歸したが、しかし趙全と李自馨は、この一時的失敗にくじけず、尙もひそかに漁陽・雲中・上谷などの奪取を試みている。[4] そしてこの頃になると、明側から逃亡してくる叛逆者の數もしだいに增し、相當の勢力となったので、まず趙全と李自馨が、これらの逃亡漢人を集め、アルタンの下に自立して一酋長となることとなった。そこでこの二人は、おのおの土堡一座を築いた。この土堡は趙全のものは五里ばかり、李自馨のものは二里ばかりで非常に堅固なものであったという。[5] さきにかかげた板升は堡子なりという定義は、これらの土堡をさしたものと思われる。

もともと、かれらは長城附近にあって北方民族侵入の防衛にたずさわっていただけに、立場をかえて中國への侵入に際しては、明側防衛軍の弱點も缺點も熟知し、それに應ずべき攻擊法を巧みに用いた。その上勇敢な遊牧民を前線部隊にしている爲、着々と成果をあげ得る狀態にあった。三十四年に入ると、度重なる侵畧に、明朝では北邊の守りを嚴重にすると同時に、終にはアルタンを捕斬した者には萬金を與えて伯爵にし、丘富・周原を捕斬したものには三百金を與え三品の武階を授けるという懸賞付の令を出すようになった程である。[6]

一方丘富・周原らは、三十七年の頃ともなると、ますます妖術をタタールの間に廣め、また叛逆逃亡の漢人を招き入れて勢力をまし、屯堡も廣大なものとなり、農耕の田畝

もしだいに擴がっていった。そして三十九年には、代表的な板升があらわれてきた。すなわち大同右衛大邊外、東勝川に接し、玉林舊城から黑河二、灰河一を經、三百餘里の地にある豊州[7]（今の歸化城附近）に城を築き墩を建て、甚だ宏麗な宮殿を造って住み、附近に良田數千畝（或は數千頃[8]）を營んだという。ここは周圍が山でめぐらされ、水草甘美な地であるが、ここを基地として、たとえば、趙全は衆三萬を擁し馬五萬匹・牛三萬匹をたくわえ、二萬餘斛の收穫をあげるに至った。これについて李自馨は衆六千を、周原は衆三千を擁し、これに相當する馬牛羊を有するに至った。[9]そしてかれらは春夏の候には耕作したり家畜を養ったりし、秋冬には狩獵などにも從事しているが、これから見ると、北方へ逃げこんだ漢人は、農耕生活と牧畜生活とを併せ行う、いわば半農半牧の生活形態をとっていたようである。さきにかかげた板升の第三の定義は、このような半農半牧生活の根據地としての城をさしたものであらう。

以上によってみると、板升とは、長城以北の遊牧民族の勢力下に作られたものであるにもかかわらず、もともと白蓮教を中心とする中國人の叛逆者が、北方の長城地帶に逃亡して創り出したものである。そして、そこでは定着農耕の生活と牧畜生活とが併せ行われていたことが知られる。

ハ、板升の發展

さて、この板升もアルタンが西方へ遠征に行っている留守中に、大同總兵官劉漢の急襲をうけて、宮殿屋室を燒きはらわれてしまった。そこで四十四年には、趙全・李自馨・張彥文らがアルタンを皇帝と尊稱し、漢人を使ってアルタンの爲に大板升を修築しようと朝殿九棟を創建したが、たまたま大風が吹きおこり、梁が折れ數人が負傷する等の事があったためアルタンも天罰を畏れて、あえて室居に住もうとしなかった。[10]ついで、四十五年三月には趙全が李自馨・張彥文らと漢人を使ってまた朝殿及び寢殿七棟を作り、東南には倉房三棟を建て、城上に滴水樓五棟を造り、畫工をして龍鳳五彩をえがかしめている。また土堡中に大宅一所と大廳三棟、門二を造り門には「石靑開化府」と題し、二門には「威震華夷」の額をかかげた。さらに東蟾宮・西鳳閣二棟を建て、滴水樓三坐を造り、その樓に「滄海蛟騰」と題し龍鳳の繪をえがかせた。これらの建造物はいずれも趙全ら自らの爲に造ったものであった。[11]

こうして嘉靖の末頃から隆慶の初めにかけて、逃亡の漢人は板升を地盤として確固たる勢力を有するようになった。隆慶四年の頃であらうか、大小の板升の漢人は、凡そ五萬人ばかりの多數に及んでいる。しかしこの五萬人のうち、初期に多かった白蓮敎徒は、凡そ一萬人ばかり、殘りは白蓮敎とは關係のない逃亡の漢人で、中には中國侵入によって掠奪して來た漢人捕虜も含まれていた。しかし、これらの板升の漢人の增加は、決して中國領內から逃れて來たものの總計ではなく、早くから逃亡して來たものの中には、既に二十年近くになっている者もあるため、モンゴリアにおいて生れた子供も含まれている。たとえば趙龍は、火泥計・窩兎・瓦兎ら男六人と三皇昏・五皇昏ら三女をもうけ、更に擺言ら孫四人まであった。劉天麒・王廷輔は各一人をもうけ、李白馨は李明を養って養子としたが、趙全も二女をもうけている。この頃になると實に三代にわたって住みついているものもあったのである。

ところで、この五萬人の漢人は、四十數人の部長の下に分かれてそれぞれ一板升を形成した。一板升で部長に屬する者の數は、特別のものを除いて大きなもので八、九百人、小さなものでも六、七百人をかぞえたという。大板升の首長としては、馮世周・孟大益ら十二人があげられ、小板升は、束打兒漢・火力赤・張榜勢ら三十二人の多きに上っている。この四十數人の部長の中に趙全らは含まれていない。[12]趙全の板升は特別豪莊なもので開化府と稱したのであるが「制度は王者に擬する」という所からみると、趙全の板升は、四十數個の板升とは同格のものでなく、一段高いもの、いいかえればそれらを支配するものであったらう。おそらくアルタンの勢力下にありながら、當時は板升の直接支配を趙全らが行っていた。すなわち、板升の中にも漢人の間に支配關係が生れていたと推測されるのである。

なおここで特に注意しなければならないのは、これら五萬餘の漢人と共に、二千餘人のタタール人が板升に住みついていることである。さきにアルタンの爲に定住的な宮殿設立の企てがあったほどであるが、遊牧民であるタータル人の中にも、殆んど漢人と變りなく板升の人となったものもあった。この事はやはり長城以北のタタールの勢力下においても、遊牧から定着、あるいは嚴密には定着といえないとしても、定着に近い生活を營むタタール人が出て來て

いることを示すものにほかならない。二十年にわたる漢人の經營が、タタール人にも部分的に影響を及ぼして來たのであらう。

二、板升とアルタンとの關係

つぎにアルタン及びその一族にとって、板升がどのような存在價値を持つにいたったかを考察してみよう。

まず板升を作った漢人の中國からもたらした技術、とくに醫術とか舟を作る技術あるいは中國侵入のための攻城器具作製の技術が、アルタン一族のために役立ったのは疑いないことである。また板升の住人が、中國の事情に通じているところから、侵入の時にはかれらの意見を參考にした。こういうところから、大擧して中國に進寇する時は、アルタンは必ずまず板升に來て屋内に酒を用意し、盛んに會合し戰鬪計畫をねって後、侵入するのが習慣になってきた。[13] 板升の生活環境が遊牧民であるアルタンらにも身近かになりつつあることを示す例である。のみならずアルタン一族の居住する帳は、夏には暑さをさけて北方の大青山へ移ったが、夏を除けば、だいたい板升のある豊州附近に置かれた。たまたま三十九年に、アルタンが西方へ遠征に出かけた時なども非戰鬪員である老幼者を豊州にとどめていたとある。これらから見ても、板升が直接間接アルタン一族にとって大きな存在となりつつあったのを知ることができる。

しかし、板升の存在價値が大きな意味を持つのは經濟的な面であらう。嘉靖三十年における馬市開設前後のアルタン一族の經濟狀態ないし生活狀態を見ると、かなり強く漢人に依存しなければならなかったようである。たまたま二十九年の冬は、北方では寒氣が嚴しく畜類は多く死亡して、人びとは糧食の不足に苦しみ、ために疫病におそわれている。三十年の馬市が問題になった時には、タタール側は牛羊羸馬に對して、布帛とともに中國の米麥を提供してくれるよう望んでいる。トト（脫脫）の言をかりれば、タタールの内で富者は馬と繒と交換する事が出來るが、貧者は饑に苦しむから牛羊と交換に菽粟を希望する。しかも富者は二、三割に過ぎず、あとは皆貧者である。ところで粟五斗と一牛、粟一斗餘りと一羊と交換して欲しいとある。[14] また三十年の冬には一應馬市の交渉がまとまったのにタタールの中國侵掠が行われている。これについて明側がアルタンを責めたところ、アルタンが言うには「タタール人の中に

は、貧乏で饑餓に苦しんでいる者がある。かれらの入掠はとめようとしてもとめ得ない。たとえば、中國においては嚴重な法律があっても民間にはやはり盜みをする者もあるではないか。[15]」と、アルタンの強い糧食要求とタタールの侵入とのうちには、このような北族の内部的事情がひそんでいるわけである。

このような情勢の下に、逃亡漢人が板升を築き附近の土地を開墾して耕作に從事したのであるから、その間にアルタン一族がこの耕地から生じる農産物を何らかの形で徵發していた事が考えられる。明人が「耕田輸粟、反資虜用。[16]」となげいたことも、アルタン一族にとっては望む所であったに相違ない。ただその收穫高が必要を滿たして充分であったかどうかは明瞭でない。豊州附近の耕地は史料によって數千畝といわれ數千頃とも萬頃とも記され[17]、廣狹の差が大きくていずれが正しいとも解しかねる。たとえ耕地が廣大であったにしても、土地の生産力とか同時に消費の面からの板升漢人の增加を考えると必しも充分であったとは思われない。むしろ、その間のたびかさなる中國侵入掠奪が不足を補っていたとも解される。

しかしいずれにせよ、嘉靖三十年の馬市の時に、あれほど烈しかった糧食に關する要求が、隆慶・萬曆の馬市には殆んど見えず、むしろ鐵鍋とかとくに農器具を要求している狀態である。しかも隆慶の馬市開設後、應箕のアルタンに諭した言葉の一節に「今板升の種田千頃、歲やや自ら給するに足る。[18]」とあるところから見れば、板升の存在價値も察せられるであらう。

すなわち板升の機能は、アルタンが逃亡漢人の生活權を保證したことに對する反對給付の役を果し、兩者の間に相互依存關係を成立せしめ、ひいては明蒙交渉の立場からある種の經濟的安全辨となっていたと解してよかろう。

二、板升支配の變容——歸化城＝板升說——

以上のように、板升はもともと逃亡漢人がアルタンの勢力下に創設したものであったが、嘉靖三十年の頃から隆慶にかけての二十年間に、確固たる地盤を築き上げタタール族の社會にも少からざる影響を與えることになった。しかし、この板升も隆慶に入ると、アルタンの愛孫であるバカン・ナギ（把漢那吉）の明朝への投降[19]をきっかけに、大き

な變化をもたらすようになった。すなわちバカン・ナギを還附するための交換條件として、明側から提起されたのは、板升に住む漢人叛逆者を献送することであった。これに對して、アルタンはやむなくこれまで關係の深かった趙全・李自馨・張彦文・馬西川・呂小吉ら（丘富は嘉靖四十四年死亡）を捕縛して明側に引き渡すという擧に出た。このため板升を形成していた主要人物の多くが除かれてしまった。從來この漢人は、アルタン・カーンにとってはよき助言者であり、とくに對明政策においては常に重要な役割を果していたのである。それにもかかわらず、アルタンがこれらの人々と孫一人とを交換することを決意したうらには、相當複雜な内容が含まれていたように考えられる。またその内容こそタタール族の社會における板升の位置を決定づけるもののようであるから、その間の事情について少し考察してみよう。

まず第一にあげられるのは、アルタンと趙全らとの關係である。アルタンが逃亡の漢人を得て、いろいろな面でかれらの意見を參考にし、とくに中國への侵攻には大いに利用しえた。そのためアルタンの立場が有利になったことはさきに述べたところである。しかし細部にわたって分析して見ると、必ずしも兩者の間は圓滑には進んでいなかったようである。たとえば對明侵攻に關しても、趙全らの計畫はがいして規模が雄大にすぎて、アルタンがのぞんでいる以上に大規模な計畫が立てられることもしばしばであった。しかもその計畫が、往々にして失敗に終り、結果は直接戰鬪にあたるアルタン輩下のタタール人の消耗をきたした。この間の關係は、タタールの統率者であるアルタンの立場と、中國から逃れ北方の地を利用して力を蓄積し一旗あげようとする趙全らの立場との相違にもとづくもので、兩者の利害がここでは必ずしも一致していなかった。現實には、それほど表面にあらわれなくても、間隙を生ずる原因が含まれていたのもやむを得ないことである。一例をあげれば、バカン・ナギが明朝に降った後の處置に關して、アルタンが趙全らの意見を聞いた時にも、一應その計畫を入れて精兵二萬を出した。しかし、それが失敗に終った時、アルタンは「はじめ自分は、明朝に通貢を請うたが、趙全らが自分には天分があるといってすすめたのでこんな結果になった」と趙全らの計畫に從ったことを後悔している。ま

たその直後明朝の使者鮑崇德と交渉した際、アルタンは明側の提案した板升の漢人を明に渡すという條件を聞いて、喜んで人をしりぞけていうには「我は亂を爲さず、亂は全らによる。」ともいっている。

このようにタタールの統率者アルタンと逃亡漢人の代表者趙全との潜在的な立場の相違が、バカン・ナギの事件を契機として表面化し、ついにアルタンをして趙全をすてて孫のバカン・ナギをひきとる立場をとらせたのであろう。

第二は、板升に基礎をおく逃亡漢人は、すでにこの頃數萬といわれる大きな勢力を形成し、アルタンの支配下においても決して小さな存在ではなくなっていたが、この板升を中心に、種々の複雜な問題が起りはじめていた。例のバカン・ナギ投降後の南下の際は、ちょうど冬寒い頃で草が枯れ馬が餓えてやせほそった。このためにアルタンの部下軍隊は、侵攻をはばかり趙全らを指さして怨詈甚しかった[20]とあるように、アルタンと趙全個人の間ばかりでなくタタール人と板升の漢人との間にも、何らか一致しない點が存していた。

第三に考えられることは、板升の存在價値として經濟的安全辨の役をなしたとのべたが、これはアルタン一族にとって、必ずしも充分なものではなかった點である。糧食のことはしばらくおくとしても、バカン・ナギについて交渉している頃のアルタンの言には、かしぐための釜の不足や、衣服としての帛の足らない事が述べられている。そればかりでなく、かってオイラートのエセンの事で述べたように、遊牧社會にあっては經濟的優位は部族の繁榮を意味し、そのためモンゴリアにあっては各部族が或は西方と或は中國と經濟的交渉を強く希望する。この點から見れば、アルタン一族が板升に滿足せず、この機會に明朝と和睦し、馬市の再開を希望するのは當然である。できれば平和の内に馬市の開設をむかえるとともに、愛孫をえて一族の平和と安定をはかろうとするアルタンの意圖は必ずしも不可解ではない。むしろアルタンの心からの願いであったろう。

主として、以上のような理由からバカン・ナギと趙全ら九人の叛逆者との交換が行われた。この九人は、いわば板升にとっては、なくてならぬ中心人物であった。したがってこの交換によってこれまでアルタン支配下の地に特異な存在であった板升も、必然的に變化をきたすであろうこと

が想像される。

しかし中心人物がなくなったといっても、二十年來築き上げた板升と數萬にのぼる漢人がこれによって直ちに四散したわけではない。その後、明朝とタタールとの間は平和をとりもどしたが、明朝ではなお板升に殘っている漢人亡命者の歸順を促している。[22] またそれにもかかわらず、板升に殘る漢人の中には、明朝やアルタンの意志に反して、かえって板升の回復をはかる者もあった。たとえば趙全の餘黨である趙宗山らは、勝手に中國に侵入して掠奪を行った。これに對して明朝は、かれらを捕えて明朝に送るようにアルタンに抗議した。この抗議は直ちにアルタンの受け入れる所となって、趙宗山・穆教清ら十三人が明朝に送られた。[23] このように板升に關する問題はまだ殘されている。しかしむしろアルタンの立場としては、必ずしも板升を消滅させようとする意志はなかったということが推測される。

對明交渉の新たな展開は、多少板升の規模の縮少と機能の變更を餘儀なくしたであろうが、數千頃の良田と數萬の漢人を擁する板升社會は、この機會に新たな意味をもってきた。アルタンが明朝から順義王に封ぜられ、萬曆三年十月にはその居所に歸化城の名を賜わった事實は、むしろアルタンの板升への積極的な前進を示すものであろう。歸化城の位置は、いうまでもなくこれまでのべてきた板升の中心地である。しかも城という名前からも察せられるように、歸化城は明らかに板升の代表的な一つと見なければならない。[24] かって嘉靖四十四年には、まだ板升に住む意志のなかったアルタンが自ら板升を根據地としたのである。そして趙全ら板升における漢人支配階級の沒落後は、かえって問題をおこした中間勢力が失われ、アルタン自らその經營支配にあたったのであって、馬市に農器具を要求した事も、その努力の一端であろう。

「こうして漢人に自治がゆるされ、アルタンの間接支配にあった板升社會が、バカン・ナギの事件を契機にその直接支配へと變容していったのである。」しかも萬曆三年十月に歸化城の城名が與えられる理由として、隆慶の末から萬曆三年にいたる五年間に、アルタンが明朝との盟約をよく守った事と、同時に部落支配に努力した功があげられている。これはアルタンの直接支配の効果が明朝にはっきり認識される程にあがっていたと見てよかろう。このようにしてア

ルタンは一族の遊牧的社會に板升の定着農耕的社會をあわせ支配することになったが、これによって、かれらはさらに農耕社會への理解を急激に深めて行き、ひいては中國との交渉を圓滑にしたと解される。

馬市が朝貢形式による單なる物々交換的なものでなく、貨幣をばいかいにした多様な交換經濟的內容を持ちつつ兩者の間を緊密にしたと思われるのであるが、それもその背後にはアルタン一族の思想上や經濟生活上におけるこのような變化があったためで、それが當時中國を中心とする經濟圏へアルタン一族を入り得るようにした一つの原因でもあらう。

またこの頃、アルタンも七十才前後の老齢期に入り精神的にも安靜を求めたためでもあらうか、ラマ教に歸依し西藏からラマ教を盛んにとり入れている。そして立派なラマ寺院を建立したが、これがために工人を中國から雇入れ、更に佛像經文を明朝に求めている。ラマ寺院の建立という定住性とか、中國文化の輸入等も板升にもとづく生活環境の變化に起因しているのではなからうか。歸化城の歸化という字が暗示しているように、物質的にも精神的にも板升を通じて中國的なものが加わることによって、アルタン一族はモンゴリアにおいて、安定と繁榮とをかちえたのである。

むすび

本稿においては明代末期北方タタール部の情勢に中心をおきつつ明との交渉の面から「板升」について考察してみた。明代末期はタタール部と中國との關係を經濟的に見れば武力による掠奪的解決法から馬市という平和的解決法へと轉換した時期にあたる。板升はこの轉換期に歸化城附近を中心として、本來漢人によって作られた城邑である。

これが明蒙交渉史上において、はじめには一種の安全辨的役割を果たし、後にはさらに平和的交渉の足がかりになって、遂に馬市の開設を可能ならしめた。またタタール部內から見れば、はじめはアルタンの間接支配下にあったが、隆慶の末、バカン・ナギど趙全らとの交換を契機に直接支配下に入った。のみならずアルタン自身も、この板升の一つを根據地とし、モンゴリア支配に努力した。これがため明朝から萬曆三年この根據地に歸化城の名が與えられるこ

とになったのである。

かくして、これから後タタール部は部族の繁榮と安定を得るようになり、對明交渉も一層緊密に進められる事になった。ただ、明人がこの頃のタタール人を熟裔と呼んでいるように、アルタン個人ばかりでなく、多くのタタール人自體が板升を一つのよりどころとし、その恩惠をこうむると同時に、ひいては漢人に對する理解を深め、板升を通して定着的生活樣式に親しむようになった事實を見のがすわけには行かないのである。

なお、本稿と密接な關係にある馬市に關しては、別に稿を改めて論述する豫定である。

註

①萩原淳平「土木の變前後」東洋史研究第十一卷第三號。

②皇朝藩部要略卷一によれば、板升は拜甡とある。言語的にはまだ確な解釋が出來ない。

③④⑤萬曆武功錄　卷七　俺答列傳(中)。

⑥明實錄　嘉靖三十四年七月庚子。

⑦明實錄　嘉靖三十九年七月庚午。

和田清「豐州天德軍について」史林第十六卷。

⑧數千畝　明實錄　⑦參照。

數千頃　三雲籌俎考　卷一　嘉靖三十九年。

⑨大隱樓集　卷十六。

⑩明史　韃靼傳、萬曆武功錄　卷七　俺答列傳(中)。

⑪萬曆武功錄　卷七　俺答列傳(中)　嘉靖四十五年三月。

⑫板升の漢人五萬人の數とうちわけの內容は趙全が明朝に送られた直後、審問を受けている間に王崇古の計にしたがって詳しく調査された結果である。從ってこの中にはすでに趙全は含まれていない。詳しくは萬曆武功錄　卷八　俺答傳(下)を參照されたい。

⑬大隱樓集　卷十六。

⑭萬曆武功錄　卷七　俺答列傳(中)、三雲籌俎考　卷一　など。

⑮萬曆武功錄　卷七　俺答列傳(中)。

⑯⑰⑱萬曆武功錄　卷八　俺答列傳(下)。

⑲田村實造「明と蒙古との關係についての一面觀」史學雜誌第五十二編。

⑳萬曆武功錄　卷八　俺答列傳(下)。

㉑萩原淳平「土木の變前後」。

㉒萬曆武功錄　卷八　俺答列傳(下)。

㉓明實錄　隆慶五年六月丙辰。

㉔歸化城が板升の一つであると言う說は和田清博士「內蒙古諸部落の起源」の中ですでにふれておられるが、本稿で一歩進みえたと思う。

(本稿は昭和二十九年度文部省科學研究助成金による「正史北狄傳」の總合的研究」の成果の一部である。)

Altan Khan and Pan-shêng (板升)

Jyunpei Hagiwara

Pan-shêng was originally built by Chinese in the closing days of the Ming (明) dynasty. In the beginning it played the role of exchange market, and later it became the site of horse market. The walled town grew under the indirect control of Altan Khan, and then as a result of the exchange of Chao Chuan (趙全) with Baghan Naki at the end of Liu-ch'ing (隆慶) it became involved under the direct rule of the Tatar khan, who made it as his base to extend his power over whole Mongolia. In the third year of Wan-li (萬曆) the Ming renamed it Kuei-hua-ch'eng, (歸化城) and the Tatar tribe with Altan Khan as its leader established themselves around this town.